仮面ライダープロメテ

少年C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダープロメテ

【Ｎコード】
Ｎ８０３８Ｕ

【作者名】
少年Ｃ

【あらすじ】
嘗て人々は火を手に入れ、その可能性を解放した。
それから数世紀、暴走した火達（ちから）が一つに集まり人々を支配しようと暗躍していた。
この物語はとある男が人々の希望の火となり、その可能性を解放していくものである。

プロローグ～点火～（前書き）

またもや見切り発車。

プロローグ～点火～

研究室の様な所で一人の男が作業している。

「よし」

それはバックルの様な形をした機械だった。
灰色の丸みを帯びた長方形のバックルの中心に、赤い三本の爪痕の様な線が入った蒼い球体が埋め込まれていた。

続いて男はそれにコードを繋ぎプログラミングを始めた。
男の顔には疲労の色が浮かんでいる。
しかし男は手を休めなかった。
数分後ようやく手が止まった。

男はゆっくりと立ち上がり、後ろの台に掛ったシートを外す。
そこには、灰色の人型のなにかがのっていた。
体のいたるところに傷跡の様な赤いラインが入っていた。
特に胸部に横に一本、両前腕、右足の脛の部分は太いラインが入っていた。
蒼い目、その下にもそれぞれラインが引いてあり、額から伸びた二股に分かれた赤く燃える炎の様な形と色をした2本の角が特徴的だった。

先程のバックルを持ち、丁度腰の位置に填める。
『ＮＯＷＬＯＡＤＩＮＧ……』
男はじっと待つ。

『……ＣＯＭＰＬＥＴＩＯＮ』
［キィィィィン］
ボディが輝き、光の中から一人の青年が現れた。
「ふう…」
男はイスに座った。
［ビーーー、ビーーー、ビーーー……］
「やれやれ、奴らは年寄りを休ませることを知らんのか」
そう言って立ち上がり、青年の横にある扉を開いた。

そこはガレージの様な場所だった。
出口と思われるシャッターの前に、灰色の車体に蒼い炎が描かれそれを横切るように赤い線の入った一台のバイクがあった。
「後は頼んだぞ【ハーキュリー】」

『ああ……分かったぜ爺さん…達者でな…』
バイクはヘッドライトを点滅させながら若い男の声でそう答えた。
男は一度頷くと青年を無理やり跨らせ、持っていた手錠でハンドルと手を繋いだ。

「おお、そうだこれを忘れるところだった」
男は青年の懐に一冊のメモ帳を入れた。
［ＢｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏＮ］
バイクは近くのシャッターを突き破って出ていった。
「これで私の仕事は一先ず終わりか……頑張ってくれ」
男の部屋の扉が開いた。

朝日が風を舞き起しながら疾走する一台のバイクを照らし出す。
「……ここは」
青年は目覚めた。

『よう、目覚めたかい兄ちゃん！』

「わっ！？バイクが喋った！？」

物語が動きだす。

灰色の戦士

駅

「ハァッ、ハァッ、ハァァッ、ヤバい間に合わなかった」
一人の女性が息も絶え絶えにそう呟きながら時計を確認した。
どうやら何らかの事情で電車に間に合わなかった様だ。
「仕方ない。次の電車で――――」

［ドォオオオオン！！］
「！？」
突然、駅の屋根が爆ぜ、その場にいる誰もが驚いた。

同時刻より少し前　別の場所

「ハァッ！！」
［バンッ］
灰色の戦士の拳が蛙がモチーフと思われる怪人の顔面を捉えた。

『フガッ』
鼻を押さえて怪人は蹲った。

灰色の戦士は怪人に歩み寄りながら右前腕部分のラインをなぞる。
指が触れた部分から炎の様に赤い光が灯っていく。

「吹き飛べ…」
そう言い、

「タァァァァッ！！」

光を纏った右手で怪人に掌底をぶつける。

［ゴォォォォダァァァァァン］

触れた右手の平から衝撃波が発生し蛙の怪人を思いっ切りブッ飛ばす。

『ギャァァァァ！！』

［ドォオオオオン］

断末魔の叫びを上げながら怪人は爆死した。

『ナイスショットだ兄ちゃん！！それが力と技の極意だ……だが、あっちって確か駅なかったか？』

「へ？」

その方向には電車の駅があった。

その後、丁度その方向の駅でなぞの爆発事件があったとニュースで伝えられた（幸いにも死傷者０）。

「すみませんでした」

私【上浦（かみうら） 千恵乃（ちえの）】が職場に着いた頃にはとっくに出社（？）時

間を過ぎていた。とりあえず上司（以下室長）に遅刻の理由と謝罪をした。あわよくばそういった理由で許して貰いたい。
が、
「…いや、てかまず寝坊ってたるんでる証拠じゃないか！！」
（御尤も）
・
・
・
・
実質私が悪かった訳で、１時間程説教されました（半分以上は早起きの利点、健康を維持する大切さを語られ、最後には愚痴になっていた）。
「コホンッ、まあ、説教はこの位にして本題に入る。前々から科学者が失踪、行方不明、になっているのは知っているな？」
「はい」
まだニュースにはなっていないが、ここ数年で何人もの科学者がそう言った名目で消えていってる。
「だからこの組織が出来たんですよね」
「その通りだ」
数年前、実際には１０年前から多発するこの件に政府は3年前にこの組織【Ｓｅｃｒｅｔ，Ｒｅｓｅａｒｃｈ，Ｒｏｏｍ】略して……特に略名は無かった（が、以後は【ＳＲＲ】で通します）。
「まあ、その中の何人かの科学者と何とかコンタクトを取れて全員ある組織に捕えられ、無理やり、或いはそういう精神に目覚めて、

非人道的な実験、研究をやっているらしい」
「そこまでは私も事前に渡された資料で把握しています」
「そうか、で今回その一人から数日前、最後のメッセージが届いた。それがこれだ」
そう言ってテープレコーダーのスイッチを押した。

『このメッセージが届いた時、恐らく私はあなたがたと連絡を取ることが困難になっていると思われる。組織はついに例の生物を使ってのテロ行為を開始しようとしている。
数時間後、私は最後の希望を放つ。頼む彼を保護してやってくれ。』

「でっ、今回ここでの初任務はそいつを探し出して貰う事だ」

「えええぇぇぇぇぇ!!」
(それを新人一人にやらせるってかなり無謀な事なんじゃ…)

「仕方ねえだろ、人員少ねえんだから。みんな海外だし…。大丈夫だって多分。あとこれテープと一緒に送られたそいつの捜索範囲ね」
「唯一の救いですねですね」
気が進まないがそれを受け取る。
「ちなみにお前何座?」
「蟹座ですけど」
「良かったな今日の朝の占い1位だったぞ。という訳で行ってらっしゃい」
「ふぁーい」
仕方なく、とぼとぼと部屋を出ていく。

[バタンッ]

ドアが閉まるのと同時に室長はテレビを点け、
『今日の運勢早見表！！まず1位は…』
別の占いコーナーを見始めた（ちなみに室長はこっちの方の占いを信じている）。
『…という訳で残念、最下位は蟹座でした。とんでも無い出来事に巻き着こまれるかも。要注意です…』
「……知らねっと」

［ピ――ン］
黒のパーカーフードにジーパン姿の青年がコイントスをしている。
［ピ――ン、パッ］
コイントスの結果は裏だった。
『俺の勝ちだ兄ちゃん。
さあ、乗りな！』

「また、お前の勝ちかハーキュリー…さあドコへでも連れて行って」
コイントスによる賭けに連敗中の青年は不満をもらしつつもバイクに跨る。

『あいよ！んじゃあ行くぜー！！』

・・・・・

「ハァァァッ……」
盛大な溜息と共に肩をガックリと落としながら歩く。
「…見つからない」
（そう言えば私探している奴の顔知らないんじゃ…室長殺す）

そう思って引き返そうとしたところで、
「なあ、そこの姉ちゃんお茶しない？」
運の悪い事に見るからにウザそうなチャラ男が絡んできた。

「今仕事中なんで」
「いいじゃんいいじゃん堅い事言わず」
（ウゼェ！今機嫌が悪いの！）

無視して通り過ぎようとすると、
「ちょっとだけだから～」
そう言ってチャラ男が肩に手を乗せてきた。
チャラ男が肩に手を乗せた。

その瞬間、私は背負い投げをして男を路地裏のゴミ箱にシュートしていた。
何事も無かったかの様に再び歩き出す私。

「君、舐めた真似してくれるじぇねーか！！」

素早く立ち上がり、先程とは態度が一変しているチャラ男。
「何、いい加減にしないとまたブン投げるわよ」
「見た目と違って強気な女だな。さすがは組織に仇なす奴らの一人」

男の眼の色が変わった。
「！！」

表現では無い本当に眼の色が変わったのだ。
黒かった瞳が赤みを帯び、体毛が急速に伸びて、肩の筋肉が盛り上がる。両肩の付け根から長い牙がそれぞれ伸びた。
足も手も大木の様に太くなっていた。

『バォォオオオ！！』

猪男（仮）一度咆えると、私の方に近付いてきた。

「ヤバッ」

流石に対怪人用の装備も体術も持ち合わせていなかった。
一目散に全力で逃げる。
ここが人通りが少ない所だっつのは、幸か不幸か。

『ブォォオオオ！！』

牙が一段と伸び、突進が来る。
私は近くの塀に登り、突進を避ける。
［ダァァァァァァン！］
その一撃はこの道の先にあった壁を打っ壊し、更にその先にあった建物を倒した。

（危なかった）と思った瞬間、
［ドォンッ］
「キャァ！？」

猪男が私の登っていた塀に張り手をし、それが崩れた。

突然の事で体勢を崩しながらも受け身を取って着地する。

『ブォォオオオ！！』

「！！」

振り向くと猪男は既に次の一撃の体勢に移っていた。

急いで走りだす。

（表の方に出るのは他の人が危険だし、かと言ってこのまま行ったら行き止まりだ）

そんな考え事をしている中に距離が徐々に縮まってきている。

一度考え事を止め、足に力を入れる。

目の前に丁度横に抜ける道がありそこに飛び込む。

『なッ！！』

猪男はギリギリまで追いつめられていた私が急に方向を変えたためスピードを殺しきれず、そのまま道を直進していった。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァッ」

今の内に体力を有る程度回復させながらどうするか考える。

突然［バサッ、バサッ］と何かが羽ばたいてる音がした。

恐る恐る音のした方を見ると、今度はカラスを模した化け物が上空からこちらを見ていた。

『見い付けた』

女性の声だった。

そう言ってカラス女はこちらに降下してきた。

咄嗟に前に跳び直撃は避ける。
右腕に嘴が掠り、服が破け血が流れた。
立ち上がり振り向くと二匹の化け物がそこにいた。

『ちゃんと仕留めなきゃダメじゃない』
『すまねぇ姐さん。でもここなら確実に仕留められますよ』

私が逃げ込んだ場所は、残りの三方を建物に囲まれていた。

『建物壊すんじゃないわよ』
『分かってますって』
カラス女は冷笑を浮かべ、猪男は殺る気満々といった様子だった。
（これは完全に死ぬんじゃ…室長の馬鹿野郎）
『大丈夫、物凄く痛いから』
猪男の体勢が低くなった。

［ピーーン―ガッ］
『！！』
見ると猪男の右側の牙にコインが突き刺さっていた。

『誰だい？』
「……」

灰色のバイクに跨った無言の人物はフードを被っているので顔はよく見えないが、体格的には男のようだ。
［ピーーン］
男はまた無言でコインをはじき上げた。

『お前ら悪党に名乗る名前なんかあるかよ！』
「えっ？」
突然バイクからそんな声が出てきた。

『おや、コイツはわたしらの組織のマシンじゃないかい、しかもたった一台のみの試作品』
『本当だ。それよかコイツＡＩがバグってんじゃねえのか？』
どうやら怪人達はあのバイクの事を少なからず知っているようだ。

『いたって正常だよ。
やれやれ、お前らまたいたいけな少女を殺してるのか。
蛙の奴は殺したがまさかまだ二人残ってるとは』

『そうさ、それが俺らのやり方さ！！毎日決められたノルマ殺(や)っときゃ大金が転がり込む』
『それにあたしら、人間の娘のか弱い声が大好きでねえ…』
猪怪人に同意するかのようにカラス女が楽しそうな声でそう告げる。

『…トコトン腐ってるなテメエら』

「ぐっ…」
黒いフードの男が、急に腹部を押さえる。
『兄ちゃん…まだ痛むんだな…だがそのうち感じなくなるさ…』
黒いフードの男の腹部に赤い色のラインが三本入ったサファイアの様に蒼い球体が浮かんできた。

左手で真ん中のラインを右側からなぞり、その流れで左肩の延長線

上に掌を上に向けた状態で構える。
「変身…」
特定のキーワードと共に右腕を左肩の方に伸ばす。
左手は左腰に叩きつけるように下ろす。
その瞬間、球体から眩い光が放たれた。
『！！…アァ！目晦ましか？』
光が消えた後、そこにあったのは薄暗い路地裏にに蒼く輝く二つの目、その下に涙の様な赤いラインが両目に引かれていた。
額から二股に分かれた炎の様な角が天に向かって伸びていた。
体は灰色、そして至るところに引かれた赤いライン、まるで何かの傷痕や継ぎ接ぎの様だった。

「いくよ」
いつの間にか猪怪人の前に移動し、その拳を腹にめり込ませていた。
『！？ーガアァ！？』
「この程度？タァッ！」
回し蹴りでカラス女の方へ蹴り飛ばした。
『キャア！？』
『ウオ！？』
小さな悲鳴と共に猪怪人とカラス女が激突し、その身を天から地上に落とした。
今までと立場が逆転したことを暗示させるように。
追いつめる側からお追いつめられる側へ。

「タイタン、コイツらもやらなきゃダメかい？」
『優しいな兄ちゃんは…でもそいつは無理そうだぜ』

『なめんなァァァ！！』
猪怪人が突進をしてきたのである。

『あの程度のパワーなら兄ちゃんの方が強い、力押しでいけ』

「分かった！」

拳を握りしめていた右前腕を左手でなぞり一度引き、左足を一歩前に出し左手を開いて相手に向け構えを取る。
闘気の現れの様に腕が赤い光に包まれ、その光が揺らめく。

『馬鹿めッ！！』
「タァァァッ！！」
猪怪人のタックルが当たる寸前、力を溜めこんでいた右腕を踏み込みと共に突き出し、胸部に大きな穴を開け、腕が突き出る。
悲鳴を上げる間も無く猪怪人は爆ぜた。

『バカはテメエだ、三下改造人間…』

『チッ！』
舌打ちを打ちながら飛び去ろうとするカラス女。
『兄ちゃん！！』
「分かってる！！」
今度は右足の脛のラインをなぞる。
右足に赤い光が宿り、低く構えた姿勢から跳び立つ。
『！！？』
「タァァァッ！！」

空中前転で進む方向はそのままに、右足を突き出し両腕を広げた体勢になった。
一瞬にして追いついたかと思うといつの間にか灰色の戦士はカラス女を追い抜いていた。

「外した！？」
地上からその様子を見ていた千恵乃が呟く。
『いいや、大当たりだ』
喋るバイク【ハーキュリー】が呟いた直後。

［ドオォン！］
と空中で何かが爆ぜた。
軽い爆発音と共に灰色の戦士は降り立った。

『ところで嬢ちゃん、もしかして俺らを探していなかったかい？』
「まさか、あんた達が博士の言っていた希望？」

『そうだぜ！！兄ちゃん御挨拶だ』
「分かっているよタイタン」
振り向くと灰色の戦士では無く、先程のパーカー姿の男が立っていた。
フードを降ろしようやく素顔があらわになった。
とても先程戦士とは思えないまだ幼さの残る顔立ち。

その素顔にギャップを感じあんぐりと口を開ける千恵乃。

そんな千恵のに構わず、
「僕、五織（ごしき）　修司（しゅうじ）って言います。よろしくお願いします」
『オレッチは、タイタン！よろしく！』

少年はお辞儀をし、タイタンと名乗ったバイクは心底嬉しそうにライトを点滅させた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8038u/

仮面ライダープロメテ

2011年10月5日20時20分発行